

銀 舎 利 考

菅 原 泰 典

はじめに

仏教起源の俗語の中には、誤った解釈が行われたままになっているものも少なくない。ここでは「銀舎利」の語を取り上げ、その語源を論じる。というのも、この問題の鍵は真諦三蔵や慈恩大師にあり、この問題を整理する作業は唯識・如来蔵方面の研究者の誰かが行っておくべきことと考えるからである。ただし、本稿では概略を記すに止める。それ故、註記等は一切省く。なお、表題に「銀舎利」としているのは米の舎利であることを示すためである。

インド学や仏教学の常識からすると、米・稻を意味するサンスクリット語のうちに śāli の語が存在し、これが日本語の所謂銀舎利の「シャリ」と関連する語であることは言を待たない。かつて、その言及が為されなかったわけではなかった。しかし、今なお仏舎利 śārira に米シャリの語源を求める通俗語源説が一般には行われている。ここでは、まず米のシャリの語源を仏典用語としてのサンスクリットに求めるなら śāli であることを再確認し、次いでそれが śārira と結びつけられ、通俗語源説が形成されていった成立過程を追いたい。ただし前半については詳述は無要であろう。そして最後に、それは本当に仏教がらみで伝来した語なのかどうかという点も確認しておきたい。

I śāli と 舎利

1 śāli の漢訳語

米の śāli と仏遺骨の śārira とを語源的に結びつけようとする通俗語源説がインドに存在した可能性は極めて低い。実は、śāli にも śārira 同様「舎利」とする音訳例があり、この通俗語源説は、現時点では、そういう共通の漢訳語を前提として中国で成立したものと考えるべきである。

śāli は普通「稻、穀」等と意識される。その例引はここでは必要あるまい。音写例の方を数例挙げておく。

- i) 「舎利 or 舍利穀」 真諦訳『俱舎論』

- ii) 「奢利米 or 奢利粳米」 真諦訳『立世阿毘曇論』
- iii) 「舍黎」 施護訳『大乘舍黎娑擔摩經』
- iv) 「舍理」 礼言編『梵語雜名』

以上の他、密教文献等には別の音写例が存在する可能性もある。ともあれ以上のように、śāli にも śarira 同様、「舍利」の音訳例が存在する。そしてその翻訳者が真諦三蔵であることにも注意する必要がある。

2 真諦訳の śāli

真諦の他の訳出経論を確認する必要がある。しかし、梵文の現存する彼の訳出文献で śāli の語が確認されるのは『俱舍論』のみ。ここでは、正式な梵文は存在しないものの、原語はおそらく śāli であろうと思われる訳例を若干確認する。

- (a) 『決定藏論』 稻, 穀
- (b) 『四諦論』 米, 稻, 穀
- (c) 『無上依經』 稻
- (d) 『仏性論』 穀中粳糧 etc.

また、やはり原語確認不能ながら、『立世阿毘曇論』には「奢利」の訳語の見られることは既述。以上のように真諦の訳語は全く統一性に欠け、同一論書内ですら訳語の異なる場合も珍しくない。米の他の原語 vrihi との訳し分けをしているわけでもない。彼は śāli をいつも「舍利」と訳したというわけではなく、結局、珍しい訳例として『俱舍論』に śāli → 舍利 の訳語が見られるというに留まる。

3 真諦訳における śāli と śarira の問題

それでは真諦は śarira の方はどう訳しているのでしょうか。本来はこの語こそが「舍利」と訳される語のはずである。必要最小限の確認をしておく。先引『無上依經』校量功德品は仏舍利供養の功德を説くが、そこでは先述の如く śāli は稻, そして śarira の方は「舍利, 仏舍利」と訳されている。これは習慣通りである。一方、『俱舍論』では śarira は「身, 體」等と訳されており、これも仏遺骨でない普通の śarira 意味の訳語としては標準的訳語である。ただし、『俱舍論』では先述の通り、「舍利」の訳語は śāli に対してあてられている。

これを見るに、真諦は晩年の訳出『俱舍論』に至り突如訳語の方向転換を行ったもののようである。つまり、それまで自らも慣例に従い、仏遺骨の意味の śarira に対し用いていた「舍利」の訳語、それを『俱舍論』では śāli の方に回すという常識では理解しがたい措置を取っている。しかし、『俱舍論』ではどうしてそのような措置をとったのか、その意図を確認することは難しい。動乱の時

代、不遇な訳経生活を送った真諦三蔵の窮状が影を落としているのであろうか。

ともあれ以上により、「銀舍利」という場合の「舍利」の表記法は、仏典の四大翻訳家の一人・真諦三蔵にその典拠があり、その原語は *śarira* ではなく *śāli* であることは明白である。しかし、その後、真諦訳は玄奘訳に押されほとんど読まれなくなったため、この米を意味する「舍利」の訳例も次第に忘れられていったものと思われる。ただし、その表記法は、後に見る如く慈恩大師、さらには弘法大師に帰せられる諸論を介し、現代日本にまで受け継がれている。結局、典拠が忘れられながらも、後世の日本にまで受け継がれることになった *śāli* → 舍利の訳出、それは真諦三蔵の置かれた不遇さの副産物だったのかもしれない。

Ⅱ 通俗語源説の形成

1 舍利 (*śāli*) と舍利 (*śarira*) の結合

以上見た真諦の訳語 *śāli*→舍利 を基に、米の舍利と仏遺骨の舍利とを結びつける通俗語源説が成立する。今のところ、慈恩大師・窺基『観弥勒兜率天経賛』の記述がこの語源説の初出のように思われる。

舍利者稻穀也。一中略一 仏体大小如穀量故以為名。

玄奘の弟子である窺基から見れば真諦は傍系になるとはいえ、両者は唯識系である点は同一。真諦訳にも目くろいは通していたと考えてよいであろう。

このように、7世紀の中国まではこの種の通俗語源説は遡りうる。ただし、日本とは違い、その後の中国ではこの語源説が強い影響力をもって受け継がれ、米の俗語「舍利」が用いられたようには思われない。そしてまた、この記述では「仏舍利に似ているから、米をも舍利と呼ぶ」の我々の親しんでいる形態ではなく、「米(舍利)に似ているから、仏遺骨をも舍利と呼ぶ」という逆の説明になっていることに注意する必要がある。

2 米の俗語「シャリ」の成立

日本の文献では、弘法大師・空海に帰せられる『秘藏記』にこの語源説の継承が確認される。

天竺呼米粒為舍利。仏舍利亦似米粒故曰舍利也。

この文はそのまま『阿婆縛抄』等にも引用されている。『秘藏記』がたとえ空海作ではないとしても、平安期には既に中国起源の通俗語源説が伝来していたと見てよいであろう。ただし、この語源説を基に、どのような過程で米の別称「シャリ」が日本に根付いていったのか、その点は筆者には明かにはしえない。

時代が降り江戸時代までには、いつしか「シャリ」が米の別称となっていたこと、及びその典拠の方は一般には忘れられかけていたことは『櫻陰腐談』等により知ることができる。

客問曰。日域関左俗呼米粒為舍利。西竺人名何。

答曰。舍利原来米粒之名也。

安永四年刊、越谷吾山『物類称呼』も同様であり、『秘蔵記』の記述をそのまま掲載している。江戸時代までには、米をシャリと呼ぶという結果のみ残り、「米の舍利から仏舎利の呼称が出た」という語源説の方はほとんど忘れられていたものと思われる。それ故にこそ、『櫻陰腐談』や『物類称呼』には、その教示の為、わざわざその典拠が示されているのであろう。

さて問題なのは、米の舍利から仏舎利の語ができたという「銀舍利語源説」でもいうべき形が以上見てきた文献共通の形である点である。「仏舎利に似ているから米をも舍利と呼ぶ」という我々の親しんでいる説相は、ここまでは全く確認できない。何時頃、逆の形態へと変化したのだろうか。あるいは、この問題の鍵は慈雲尊者欽光『梵学津梁』に代表される、江戸期日本の梵語学の諸論書にあるのかもしれない。しかし、それは筆者が手許で確認できる状態にはない。同様に、「銀」の字を付した「銀舍利」の表現もここまでは確認できない。しかし、ここから先は、むしろ国語学の領域であらう。仏教学の立場としてはこの辺で考察を止め、残った問題は国語学に委ねたいと思う。

Ⅲ 非仏教関連の考察

さて、それでは、この「舍利」という語は本当に仏教がらみで日本に伝わった語なのであろうか。以上見た如く、確かにその表記法は仏教がらみである。しかし、アジア各地に確認されるその対応語の存在を考えるなら、語彙そのものは仏教とは関係なく、稲作の伝来とともに伝わった語である可能性もある。しかし、この問題は仏教学の領域を遥かに越えている。農学・文化人類学・東洋史・言語学・国語学等々の知識が必要となり、筆者個人の力では解明は不能。今は、ひとまず現段階までの各方面の研究の趨勢をまとめ、今後の研究の指針としたい。

i) 米の舎利の原語 śāli は、実は、「語源」ではない。『リグ・ヴェーダ』には米は登場しない。『アタルヴァ・ヴェーダ』以降 vrihi が登場するが、śāli は未出。śāli が登場するのはウパニシャッド以降と考えられる。それ故、vrihi にせよ śāli にせよ Skt. 固有の語彙とは考えられず、他言語から入ってきたもの

と考えられる。つまり、「語源」は更に遡ったところにある。

ii) 農学方面の成果に従えば、稲作開始地は、現在の日本では、雲南からアッサムにかけての所謂「照葉樹林文化圏」とされる傾向にある。たとえ、そこが起源地地ではないとしても、稲作という画期的文化とともに、ある地域から稲作に関わる用語が同心円状に伝播した可能性は高い。つまり、インドと日本の稲・米の言語は、語源関係ではなく、兄弟関係の対応語である可能性がある。

iii) 国語学では、アジア各地の稲・米の語と日本語の関係を、イネの例を除いては、一般に否定するようである。例えば、Skt. *vrihi* は rice 等西洋系の米の諸語の語源になっていることはよく知られているが、その *vrihi* と日本語「ウルチ」の関係の方は否定されている。しかし、これは再考の余地がある。従来の議論は、Skt. *vrihi* を「語源」としてインドネシア系の語 *bras* を介して日本語のウルチへ変化するのは無理との議論。しかし、先述の如く、*vrihi* はそもそも語源ではありえない。稲作開始地がインドではないとされる以上、未知の言語 *x* を語源として、一方は Skt. *vrihi*, タミル語 *valci*, *arici* へと変化し、他方はウルチへと変化したと、このように発想を変えるべきであろう。

iv) 同様に *śāli* にも *sāli* (パーリ語), *salu* (チベット語), *s'al* (朝鮮半島), シャリ (日本語) という対応語が存在する。この関係は再考すべきである。日本語シャリと Skt. *śāli* は同一の語源 *x* に由来する兄弟語の可能性がある。

v) しかし、『秘蔵記』では、日本でもやはりシャリというとは書いていない。『倭名類聚抄』にもそういう記述は無い。当時の日本には米の別称としてのシャリの語は存在しなかった可能性が高い。あるいは、かつて類語が伝来したものの、平安時代までにはかなり異なる語形に変化してしまったのだろうか。中国と異なり、日本で「舍利」の表現が受け入れられ発展したのは、日本では民衆の底辺レベルでそういう何らかの類同表現が残存・流通していたからではあるまいかと推察されるが、今のところ詳細不明である。

以上のように問題を整理するなら、米を意味するシャリの語は、稲作伝来とともに、既にその類語が日本に伝わっていた可能性がある。しかし、現段階では証明不能である。とするなら、今日我々の親しんでいる米の俗語「シャリ」の直接の起源としては、今のところは、第二波としての仏教がらみの伝来を想定しておくのが穏当のようである。

〈キーワード〉舍利, *śāli*, *śārīra*

(東北大学非常勤講師)